

スイスはこんな国

サンモリッツ・ルガーノ周辺の“見て・食べ・歩き”

=日本・スイス 国交 150 周年記念に=

(4)

山本 浩 (29 政経)

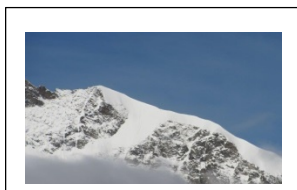
素晴らしい好天に恵まれる

7月14日(月)、6時に起きて外を見たら薄曇りで些かがっかりしていたが、7時に朝食を済ませて外に出てみたら何と有難いことに青空が広がり、正面に連なる山々の姿がクッキリと見えてきた。これ位近くに山と向き合える展望台も滅多にないだろう。

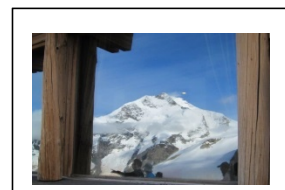
先ず真正面の巨大な山ピッツパリュ Piz Palü 3,900m は、白装束で六方を踏む団十郎といったところだ。右へ Bellavista 3,922m、黒い鋭鋒を突き上げる Crast'Agüzza 3,854m に続いてベルニナ山群の盟主ピッツベルニナ 4,049m がスールレイ峠とは逆の右肩にビヤンコグラート(白い稜線)を流し、これらを支えるかのようにペルス氷河 Vadret Pers が帯状にうねる。振り返ってレストランの窓を見たらこれらの山々が鏡となって映っていた。



ピッツパリュ



逆流れのビアンコグラート



窓に映るピッツベルニナ

素晴らしい好天に恵まれた幸運を胸に始発のロープウェイに乗り込む。昨日は気付かなかったが、眼下のダウンヒルコースには下にシートが敷き込まれていて夏から整備が行われている。

ディアヴォレッツァ湖 Lej da Diavolezza の青緑色と雪のコントラストが美しい。好天のお蔭で黒い湖 Lej Nair と白い湖 Lago Bianco も一望にすることが出来た。



黒と白の湖



はぐれ牛



エンガディンカード

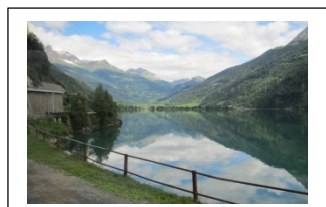
下へ降りてベルニナ急行に乗るまで40分ばかり時間があつたので、ファイン谷 Val da Fain からの流れとベルニナ川が合流する辺りを散歩した。川辺には可憐な花が咲き、放牧の牛の群れがのんびり草を食んでいる。中には群れを離れて川の中を歩くはぐれ牛もいた。

今日でサンモリッツに入ってから1週間が経ったがこの間、歩くため、見るため、食べるためにポストバスをはじめフニクラ、ロープウェイ、リフト、ベルニナ鉄道と様々な交通機関を利用してきた。2泊以上宿泊したホテルが貸与してくれるエンガディンカード Berg bahnen inclusive/Engadin card のお蔭で全て無料だった。これは冬がトップシーズンのサンモリッツ周辺ホテルが夏場の集客対策として行っているもので、ベルニナ鉄道の利用可能範囲はアルプグリユム迄だが、我々にとっては大変有難いものだった。勿論スイスは観光立国で交通網は国の隅々まで網羅されているし、利用の面でも全国何処へ行っても無料か半額で利用できるプリペイドカードのスイスパスをはじめ、地域ごとのリージョナルパス等様々な工夫が凝らされている。

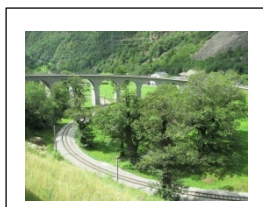
ベルニナ急行は先日トレッキングに訪れたベルニナ谷最後の駅アルプグリユムを過ぎるとポスキアーヴォ谷へ一気に高度を下げていく。ポスキアーヴォ Poschiavo 1,014m 迄 1,077m の下降だ

からこの辺りが路線設計上、箱根登山鉄道が参考にしたところだろう。植生もレルヒ等の針葉樹林から檜等の広葉樹林に変わり、言語もイタリア語圏に変わる。この辺りは1803年にグラウビュンデン州の一部としてスイス連邦に正式加盟したが、北イタリア勢力と抗争の歴史を繰り返した土地柄である。

穏やかに水を湛えるポスキアーヴォ湖を過ぎ、ポスキアーヴォの中心地を左手に見て抜けると、この路線の名物、ブルージオループ橋 Kreisi viadukt Brusio が近くなりカメラの準備で忙しい。高低差を調節するためにループを多用するこの路線にあっても、360度の真円に近いループは此处を置いて他にはないらしい。



ポスキアーヴォ湖



ブルージオループ橋



ループ橋を行く

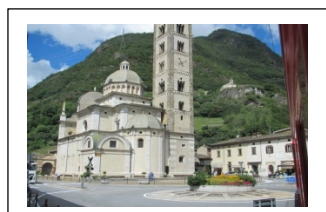
国境の街イタリア・ティラーノへ

スイス最後の駅カンポコロニョ Campocologno を過ぎ、16世紀のマドンナ巡礼教会の真横の路面を走るとそこが終着駅ティラーノ Tirano 429m だった。ベルニナ急行を走り終えて、沿線に奇妙な建築物や広告が全くなく、変化に富んだ美しい自然を心行くまで堪能出来てさすが世界文化遺産だけのことはあった。

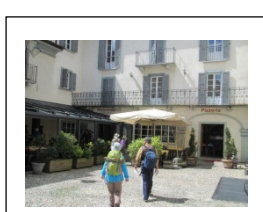
イタリア共和国ロンバルディア州ソンドリオ県のティラーノは国境の街らしく、スイスとイタリアの鉄道駅が隣り合っているが繋がってはいない。通貨はユーロだけでなく、スイスフランも十分通用する。

昼も近いのでルガーノ行のバスに乗る前に昼食を取ることにした。駅周辺のレストランかと思ったら、志波さんはアッダ川 Adda を越えて旧市街の方へどんどん行く。暑くて大変だ。天気が良くて南の低地、「100mの高度低下で0.6度の気温上昇」で計算すると10.8度、これで40分歩いてやっとアルボニコ通りのレストランに辿り着いた、Antica Osteria dell'Angelo そのあとに Ristorante-Pizzeria とあるからピッツァ等の軽い食事処であるらしい。

テーブルには自由に食べられるグリッシニ Grissini が置いてある。生ビールの後はイタリアに入ったことだし、きしめん風の Pasta、タリアテッレにした。



ティラーノ・マドンナ巡礼教会



旧市街のレストラン



サンマルティーノ教会

バスの時間まで未だ少し余裕があるので旧市街を散策する。桑原さんは15世紀の城壁があるといので探しに行ったが、道が判らず帰ってきた。古い家並みに囲まれた狭い石畳の道が続くこの辺りの佇まいはしっとりと落ち着いて、真に感じが良い。

1479年に造られた42mの鐘楼があるサンマルティーノ教会 Parrocchia San Martino へ行ってみた。ティラーノの教会といえばベルニナ鉄道の直ぐ脇にあった16世紀のマドンナ巡礼教会が有名だが、旧市街の中心に建つこの教会は聖堂内部の祭壇や周りの装飾にも煌びやかさがなく、歴史の重みを感じさせてくれる。



サンマルティーノ教会内部



天井絵のあるバルコニー



アッダ川

そぞろ歩きを続けると小さな石像のある水場。壁に PALAZZO MERIZZI とあったので中を覗いてみる。中庭を囲んだ古い漆喰の建物だが、美しい天井絵のバルコニーが良い。17世紀のものらしかった。

再びアッダ川に出た。街中なのに白波を立てる激流、橋の欄干のゼラニウムを見ながら駅の方へ向かう。ティラーノもまた時間さえあればゆっくり見たい所だ。

途中ジェラート屋さん Jelato (イタリアの氷菓) を見付けた。無類のソフトクリーム好きの別所さんに釣られてソフトクリームを頼んだが、何故か私のものは直ぐにベタベタ溶け出して参った。支払いは勿論スイスフラン、2 CHF は手頃な値段だ。

バス乗り場は線路の下をくぐった反対側で、バス路線だが「ベルニナ急行」なので列車と同じ赤く塗ったカッコイイ大型バス。乗ってみて驚いたのは全席満員だ。予約なしでいきなりは乗れない。

14時20分発、ルガーノ迄3時間のロングドライブが始まった。コモ湖 Lago di Como まで繋がるアッダ川に沿ってヴァルテリーナ谷 Val Valtellina を西進、県都ソンドリオ Sondrio を通過してほぼ中間点のコモ湖北端ソリコ Sorico でショートストップ。15分休憩の後、コモ湖の西岸を南下、メナッジオ Menaggio から峠越えしてルガーノ湖北端のポレッツァに至り、ガンドリアでイタリア領ロンバルディア州からスイス領ティチーノ州へ入る。古くからの漁村だった幾つかの集落を通るのだが、その道はこのバス1台が通れるぎりぎりの幅しかなく、運転技術の見事さに驚かされる。

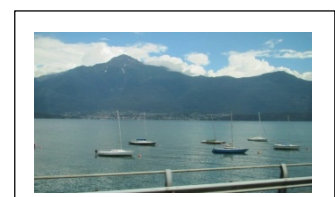
つまり歴史を重ねてきた家々を取り壊してまで道を広げるようなことはしないのだろう。



ベルニナ急行バス



ソリコで休憩



コモ湖

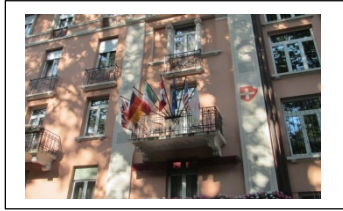
再び国境を越えルガーノに

国境を越えて15分ほどでルガーノ Lugano 273m 到着。ルガーノ湖を囲む山の斜面に鉄道駅があるのでバスもまた駅前に停車。湖畔にある街の中心部へはかなりの距離の下りになるが、幸いなことにホテル・フェデラーレ Hotel Federale はすぐ下に見えていた。

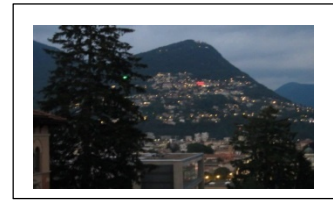
玄関に万国旗が飾られていて日本の旗もある。このホテルのオーナーの夫人は日本の方で、日本びいきのホテルとは聞いているが、残念ながらご夫妻は不在で我等の滞在中はオーナーの母君に何

かとお世話になった。

ルガーノの名前は聖なる森を意味するイタリア語「ルクス」から派生しており、考古学的にはエルトリア人とケルト人の集落だったことが判明しているが、1513年にスイス領となるまで14世紀初頭から16世紀にかけてはミラノ公国、フランス、スイスが交互に支配を繰り返す歴史を辿っている。



ホテル・フェデラーレの万国旗



ルガーノ夜景

夕食はこのホテルの階下 Ristorante San Lorenzo だったが、有難いことにメニューは日本語もある。ビールは相変わらずの CALANDA だが、ルガーノのメルロー種赤ワインはその昔ボルドーから持ち込まれた苗木がティチーノの土地と相性が良く、毎年ワインフェスティバルが行われるほどの名産地になったワインで、このホテルのハウスワインは、Rosso Federale Ticino DOC Merlot Darling 2013（気に入ったので帰国の際購入したもの）。そして私がメニューから選んだ食事は“野菜のグリルと水牛のモッツァレラ、角切りウサギのソテーマッシュルームソース、デザートはチョコバナラアイス”だった。

明日の予定について志波さんから最後の日になるので皆さんの要望に沿いたいと、4つの案が出された。(1) サン・サルバトーレへ登り半島を縦走、モルコーテから船でルガーノへ帰る、(2) ティチーノ州都ベリンツォーナ世界遺産の3つの古城を見る、(3) マッジョーレ湖畔のロカルノを訪ね10世紀の古城等見学、(4) モンテブレの裾の漁村ガンドリアでイタリアとの密輸の気配などを見る一だったが、我等は山のグループだからと1案に衆議一決して解散した。

今夜はあと1日の歩きで終わる安堵感から数名が桑原ルームに集まって2次会。桑原氏持参のバレンティンを飲みながら暫し語らいの時を過ごした。

最終日はサン・サルバトーレに登る

7月15日(火)、8時半にホテルを出発してパラディーソ Paradiso にある120年の歴史を誇るフニコラーレ乗り場へ向かう。乗り場の玄関には、またもや万国旗(日の丸もあり)で Funicolare Monte San Salvatore とある。それにしてもスイス人位旗の好きな国民も珍しい。建物、山、船など到る所に国旗、州旗、町旗、万国旗などがはためく。

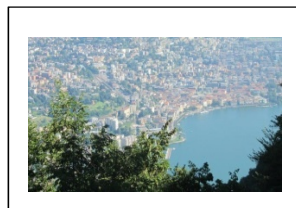
ちなみにスイス国旗は、13世紀神聖ローマ皇帝から使用許可を得た白十字を原初3州の1つシュヴィーツの兵士が対ハプスブルグ独立戦争の際、血を示す赤い旗の端に付けたのが始まりで、やがてこれが全土に広がって19世紀に正式国旗となっている。また、この頃創設された国際赤十字が創設者のスイス人アンリ・デュナンとスイス国に敬意を表して赤地に白十字を反転して白地に赤十字をシンボルマークにしたことは有名な話である。

フニコラーレはパラディーソから中間駅のパツアーロ Pazzallo 迄7分、方向を変えて頂上駅 884m 迄5分、此処から15分歩いて小さな教会の建つサン・サルバトーレ頂上テラス 912m へ到達する。

教会の屋上に上がることが出来て周りを見渡す。氷河湖のルガーノ湖を取り囲む山々と街並み。上から見下ろすルガーノはチューリッヒ、ジュネーヴに次ぐスイス第3の都市だけあって大きい。しかも伝統的なティチーノの赤屋根瓦が多いために一面に広がるオレンジ色は、真に南国的で美しい。市街の東に対するブレ山 Monte Brè 933m は、麓からの集落カスタニョーラが中腹まで駆け上がるかのように散らばる。これから歩く南の山稜の彼方に見えるサン・ジョルジョ山 San Giorgio 1,096m は2億4千年前の化石が大量に発掘された世界自然遺産の山だ。マッターホルンが見えることもあるというが、遥か北の雲の上に雪山が顔を覗かせるのみ。近くに雪の影はない。南国の香り漂うスイスの中のイタリア。陽光と湖の青、濃い緑に包まれて眺望を楽しんだ後、今回の旅最後のトレッキングを始めた。



サン・サルバトーレからルガーノ湖



ルガーノ市街



頂上教会

後で知ったことだが、サン・サルバトーレ西側山麓のモンタニョーラ Montagnola は小説家、詩人、画家のヘルマン・ヘッセ Hermann Hesse が42歳から85歳の生涯を閉じるまで住んだ所で、近くのサン・アンボディオ教会にニノン夫人と共に葬られている。

一旦頂上駅まで下りて西山腹を巻き南の稜線に向かう。歩き始めて直ぐに珍しいものを見つけた。一見カタクリの花かと思ったが、野生のシクラメンだった。



シクラメンの原種



グロット



誰の住み家？



どちらがサン・グラト教会か

Ciona と云う小さな部落。道端のプラタナスの大木に大きな洞が開いている。何者の住み家だろうか。3本の旗（国旗、州旗、村の旗か？）を飾った簡易レストランがある。こういうのをグロット Grotto と言うらしい。グロットは小さな洞窟の意味で、元は農家がワインやチーズを客に出したもので、ティチーノの郷土料理を味わいたければこれに限るとは、これも後で知ったことだった。

カローナ Carona 602m は割に大きな集落で、メリデ Melide への分岐。メリデは、実物の25分の1のスイス・ミニチュアールがあり対岸のビソーネ Bissone へ渡る橋がある所だ。

樹林帯を抜ける頃、正午を知らせる教会の鐘の音が聞こえてきた。黄土色に統一された造りの立派な教会だったが、更にその先には中世のものと思われる古色蒼然とした教会があり、どちらが San Grato 教会かは判らない。

高度はかなり下がってきてブラックベリーが一杯実を付けている木を見つけた。湖岸が近くなると糸杉（チプレッソ）や棕櫚、ユーカリなど亜熱帯の木々が多くなる。

13時30分、ルガーノ湖の真珠と言われるモルコーテに到着。湖に浮かぶ食堂 Camere Zimmer

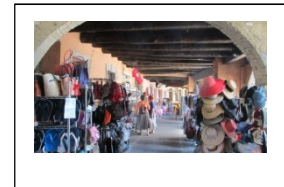
で昼食をと思ったが満員。止む無く山側の Ristrante della Posta で少し遅い昼食となった。



糸杉



湖上レストランは満員



アーケード街

生ビールの後、冷製ガスパッチョ（スープ）、トマトモッツアレラパスタバジル添え、ピッツァ・レジーナにバニラジェラート、一寸食べ過ぎか。食後、船の出る時間までアーケード街などを散歩する。この辺りの建物には 16 世紀頃のものもあるらしい。土産物を物色して船着き場へ向かう。

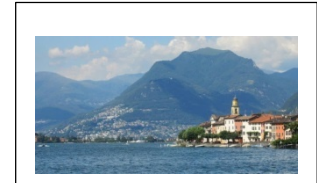
16 時に発船したこの船は船首にイタリア国旗、船尾にスイス国旗を掲げている。ルガーノに着くまで 5～6 か所の港に停船するが、その港はイタリアであったりスイスであったりするので成程と納得した。



モルコーテから乗船



舳先にイタリア国旗



対岸はイタリアの街

ヨットやモーターボートが行き交う湖上を風に吹かれて走るのは楽しい。メリデの橋の下を潜ると、正面にルガーノの街が近くなってくる。モルコーテを出てから 50 分でルガーノ桟橋到着である。

鉄道駅のすぐ下にあるホテル・フェデラーレまではかなりの登り。チッタ駅からフニクラに乗ることも出来るが、山のグループとしては歩くしかない。途中 9 世紀創建の聖ロレンツォ教会 San Lorenzo の横を通る。何度も手が加えられ様々な様式が混在する建物というが、正面のルネッサンス彫刻は素晴らしい。



ロレンツォ教会



ルネッサンス彫刻



フニクラもあるが

18 時前、部屋に入って一休み。今日も色々と充実した一日だった。

今夕のディナーは芝生の中庭に設えてある。メニュー 4 か国語の中に日本語、コース 3 品目の中から選べた私の選択は、子牛のツナソース、チリコンカン（肉入り唐辛子料理）、デザートはチーズセクションにした。「デザートにチーズ」はコペンハーゲンで経験していたが、各種チーズにブラックベリーが添えられていて、甘いケーキ類などより大人っぽい。

何と言っても今夜はラストナイト、ガイド志波さんの慰労にかこつけて 2 次会に繰り出すことになった。目指すは湖畔の繁華街だが、行ってみると 12 名が座れる店がなかなか見つからない。

やっと湖に近いオープンテラスの店に落ち着いて 2 次会開始。もはやワインの段階はどうに過ぎ

ていて 45 度のシュナップス、梨の蒸留酒ウィリアミンヌ Williamine を先ず 1 杯。次いで、ここはスイスのイタリアだからとグラッパ Grappa を頼んだが、これはなかなかの上もの。大変美味かったが、効き目も相当のもので 2 杯で出来上がり。街灯の明かりを頼りに坂を上っていくと、未だ明るいショウウィンドウの中に千万両の招き猫、しかも此奴は手を振って招いている、こんな愛嬌のある招き猫は日本でも見たことがない。やっどこさでホテルにたどり着いたのは、クローズの門限 23 時直前だった。



やっと 2 次会



手を振る招き猫



夜の高級店街

ミラノからドバイ経由で帰国

7 月 16 日（水）小鳥の囀りに目が覚めた。今日はミラノから帰国の旅になるので朝食後、お土産の物色に街へ出かけた。お目当ての店は Co-op。スイスでスーパーマーケットと言えば Co-op と Migros の 2 つが大半を占め、あとは駅で KIOSK を見かけた位だが、やはり行くなら日本でも馴染みのコープになる。店内の品揃えは豊富で、特にスイスらしくチーズなどの乳製品、ワイン、チョコレートなどが目に付く。

日本でスイスワインを眼にすることはほとんどないが、これは、スイス国内にあっては潤沢に生産されているながらワイン好きのスイス人が殆ど飲んでしまい、輸出余力がないからだそうだ。また、スイス人はチョコレートも大好きで、年間 1 人当たり消費量は 12kg で世界一。ちなみに日本は 2 kg で 20 位にも入らない。我等はマイルドで口当たりの良いミルクチョコレートをよく口にするが、実はカカオとミルクの合体は簡単なことではなく、1875 年スイス人薬剤師のアンリ・ネスレ（後にネスレの創業者）とダニエル・ピーターが苦心の末、開発したものだった。

出発時間ギリギリにホテルへ帰り、オーナー老婦人の見送りを受けて 10 時 20 分出発、ミラノ空港へ向かう。



ミラノ空港



ミラノ テイクオフ

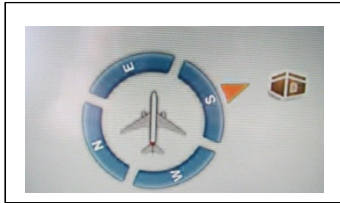
ドライバーは陽気で気のいいイタリア人らしくよくしゃべるが、途中アウトバーンに乗り損ねてバックしたり、また道を間違えたりでかなり危なっかしい。それでも何とか 1 時間半弱で空港に到着した。

ミラノはイタリア屈指の大都市で空港もそれなりのものかと思っていたが、意外に簡素でスーパーマーケットなども少ない。それでもグラッパの小瓶は何とか買い求めた。

此処から志波さんはオートルートガイドのためシャモニーへ、桑原さんは何時もの如くお孫さんの許ロンドンへ。日本への 10 人だけになって旅の終わりを実感する。

トランジットの5時間をドバイで無難に過ごし、ラストフライトで溜まったコインすべてを募金袋 Emirates Airline Foundation に入れて7月17日（木）17時20分成田に到着、心配したほどの暑さを感じないで家路に付けたのは幸いだった。

今回の旅では随分色々とスイスのことを知ることが出来たし、勉強の機会も与えられたように思う。



方角はメッカを示す



ドバイのシーフードは敬遠



コインは全て募金袋へ

守り続けたい友好の絆

何と言っても今年はスイス政府公式使節団代表エメ・アンベール Aimé Humbert-Droz が1864年2月6日オランダ公使館、長応寺で日蘭修好通商条約を締結してから150周年の年である。ペリーが来航してアメリカとの門戸をやっと開いた1858年から僅か6年後に極東の日本市場開拓を求めてきたのは、既にヨーロッパにおいて成功を収めていた繊維産業と時計産業を中心とした市場の更なる拡大を図るものであったにせよ、同じ小国ながら前向きに進もうとする姿勢にシンパシーを感じたからではなかったかと思えてならない。

日本とスイスの間には随分多くの姉妹・友好の提携が結ばれており幾多の類似点が見られるが、スイスは国土の大半が山岳地帯で農作物は少なく、めばしい資源、産業がないためにフランス革命の際、ルイ16世を最後まで守ろうとした話にあるような「血の輸出」傭兵稼業をせざるを得なかった苦難の時代を経験している。

5か国と境界を接し、領土を巡る戦いを繰り返しながらも1815年ウィーン会議以降、永世中立を国際的に認知させ、二度の大戦を経て国際政治情勢の変化におもねることなく国連、EU不参加を通してきたが、2002年には国民投票の結果190番目の国連加盟国になっている。然し、様々の国際機関の本部設置場所であり、世界一信頼できる銀行の国であるなど、世界中から寄せられる信頼度の高さは抜群のものがある。

時計と言えばスイス製、万能ナイフはスイスアーミー、この小さな美しい国のフラッグはあまねく世界にはためいている。

時代の波によって、これから日本もスイスも徐々に変わっていくだろうが、長年培ってきた友好の絆は大事に守り続けたいものである。

記念の2月6日を期して両国同時に150周年記念切手が発行され、今東京にはスイスからこの年を記念してフェルディナント・ホドラー展、チューリッヒ美術館展が来ている。スイスの旅の余韻と共にゆっくり楽しみたいと思っている。

2014年11月2日 スイスの旅を綴る
山本 浩